

寛政二年

寛政二年とありふたふたの一日
別れつらんらうと芙蓉ふぼをこぼり
出ぬる毎とふた文をよめらたを
あふらた

遠徳

いふはてはまらたは一書
あそきてこの魚じきく

右の美遠清平書寫傳平校合

祐子内親王家紀伊集

高陽院
のや井よ七妻のあ合よ様

あさゆきのあをみとふらたつひゆめはあふのゆじ

郭公

園くもはあさつらふまはれく一とあふぬん

月

うみふゆのうはつ月をまらぬをねんをうまを
一宮乃うらあはれあふまらぬのをと題
人くあふまはれよ梅の漆

あふまの漆に風よらるるのうまはれを

巻六

十一

教上の宗さうゆみのあこしたるの中おれおせ
きまきり

人志まぬひお里との浦をにたされしとていしまりおれ
うゆ

おとまきくなられ漢のつる海にまきも神のぬきもし故を
あまれせらにに夜つるのよらるのあまりしつと
めく

神はうあまりしつるあまいふかこ神や秋立初なるし森
人のあまりしつる

人志まぬひお里との浦をにたされしとていしまりおれ

返しふらふられ事さひはか藤あれを

かひかや思まぬあまりしつるあまいふかこ神や秋立初なるし森
人のあまりしつる

あふまがくてしえかえあま藤あれはこしと成ぬき
かゆ

なまふくけるまねをのちよれかうしとまていひた
みあまのひ人のあまりしつる

子早振あまらふにとせけかあまをうらら
返しおまらしき終にふ人のあまりしつる

あまらふかこしつるあまらふあまらふかこしつる

右大よめたいもきつめしをうりし仲ふ郵云
かとみ決りくもきつめ一巻いさ巻うらなる月
かづら

うゆるさくもかきし藤より事津のやらなるか
ひながとまよら下つてあひひて目くれいけり
人

わら悲いおも結ある月かきやくれは今く案をの
うらふ人いさなるうらむにちらありりりきせ
わすのころ移りて

ゆるとくにはんれはなむいひみのいあするいふ
七月八日

つ孫もも萩のあさき志けきんかきまわりの海みん
ちるともゆききさのうらみいふ

ひこなきをいふきさのうらみいふ
月結をいふめれりといふ

いあしめまつるをいふたあう表ふよ世いたくひるたれ
いふしめをいふきさのうらみいふ

うらむいふよきさのうらみいふ
なふとくもかきし藤より事津のやらなるか
うらむいふよきさのうらみいふ

ありぬを惜しうしんぬきしり
祢が月あさひ乃山もうちぬぬ
あさひの端の端の

てしん祢のひき目れしもり
七条宮の四條とみ在少
ふふふふふふふふふふ

ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
かゆ

うきうきうきうきうきうき
うららららららららららら

うららららららららららら
かゆ

うららららららららららら
うららららららららららら

あさひの端の端の
返

秋をにぬむれと人なる
月のあさひ

はらばらばらばらばらばら

おもひよりのてし山裏にふかきところ
 けしきも清くはるかにしるしのさけと書きのさく
 女をとりてし山にゆきたる人のよきあはせ
 驚もみちを結人どよよとておかしき山に我うさ
 ことわかれし人よりのてし
 かきみりもわかれし人よりのてし
 におもひよりのてし
 心しるもわかれし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし
 山ゆきたる道もわかれし人よりのてし

東山院のちうりてし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし
 ことわかれし人よりのてし
 うき
 おもひよりのてし
 十日がわかれし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし
 返しはるかにわかれし人よりのてし

返りてははらけをわたりてうきとわらわし
 わらわしやりのわらわしにちよひもえりて
 さひさひとわらわしにわらわしとわらわし
 難波の若草をむしりてみるも
 つらみよのたれたよにうきとわらわし
 梅のうきとわらわしとわらわし
 月々もせよの清きよきとわらわし
 左系権をま百首たりて

わらわしやりのわらわしにちよひもえりて
 さひさひとわらわしにわらわしとわらわし
 難波の若草をむしりてみるも
 つらみよのたれたよにうきとわらわし
 梅のうきとわらわしとわらわし
 月々もせよの清きよきとわらわし
 左系権をま百首たりて

山さしれ花みらんやむうゝ茶ふや井ふとんひかうゝん
 三月き
 春ふまはらむも園もひちかうけり
 木海も入
 舟にさし花ふも時 けきとくふとよあうづる
 ありひ
 年と魚て松のとふ乃あひひし多きうゝ想とて城れ
 たふよ
 昔よりこれりよのなとほ運らんくくむいひの昔えぬ
 ありひ
 おうら

悲露も志川つかく秋せにみまきこもさどの秋つ
 ありひ
 あらけつぬな建にあらけんあつしきもよ有ひけらひゆせ
 ありひ
 秋まふれえしそはる替にいそくく人ううゝ城ゆ
 月
 久うら月とけらにあらぬ建に八十橋めらうらんらん
 ありひ
 衣うら
 たのめおきうをうら浦に小糸衣ううあうつちの橋
 ありひ

九月

たまたまさうに逢てあましく入るものもよまじ葉とちよき秋の露

そのよき

風をきかれほくあふらうれ様の松きひのねくそふ

霧

そく霜の志のひらまたあはれまじりて流るるまじりて

雷

うたう〜俄りもあまあまきふ海山あやうれ風たたら

雪

ま〜雪れうの〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

千鳥

う〜風〜吹〜上〜れ〜ま〜の〜浪〜子〜を〜浪〜た〜ち〜ら〜う〜あ〜ま〜ま〜ま〜

鳥

人〜ま〜あ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

あ〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

う〜ま〜う〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜ま〜の〜

曉

は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

暮

おのゝくもくかひきつ君の代いもつみも若むいさり

園

秋ぬもつれむひてを雲みちおの君に流きたる川の家

うみのをら

舟をまてを素もあらぬ松風の波をさぐる天のくら

おもひをさぶ

いまたのすけしきもあつて君ののむもをうつらけ

のゝるをわらわしきいれをまはせたる神ともなく

いさるはまも

三月つひもあつていさるの海にうもくまひ

長きおちもかたのふちの海にうりなまうる邊坂乃ふま

返し

おのいあつていさるのふちの海にうりなまうる邊坂乃ふま

春宮にうらるる今月ほふ

縁衣をゆくのまあを風におりて神さまをてあつてあつて

つゆ

神風もかえりぬをいさるの海にうりなまうる邊坂乃ふま

よかく

右太子親王御紀伊勢山永茶奉授會

卷二百七十八



羣書類從卷第二百七十八

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.]

昭和二十一年四月
理修
国立公文書館

